Osaka Shoin Women's University Repository

内田魯庵研究

『文藝小品』所収初期文芸評論の一考察

――「詩文の感應力」「詩文の粉飾」「詩辨」について――

木村有美子

1

魯庵が『文藝小品』[注1]を博文館から刊行したのは明治32年9月、[注2]「山田美妙大人の小説」で文壇に登場してから十一年目のことであった。この間の魯庵の文筆活動は、文芸批評及び評論、翻訳、随筆、小説と極めて多岐にわたっている。明治25年3月には文学概論書『文學一斑』を、27年4月には痛烈な文壇批判書『文學者となる法』を、31年3月には小説『くれの廿八日』を世に出しているし、『罪と罰』全二巻の訳出を行ってもいる。後世に残る事業の殆どが、この十年余の間に集中的に発表されているのである。魯庵を論じる上で、こうした初期の活動を無視できないのは言うまでもないが、この期の魯庵を知る一つの手がかりとして『文藝小品』の存在をも疎かにしてはならないであろう。というのは、『文藝小品』は十年余にわたる文壇生活をふりかえって魯庵自身が編んだものだからである。刊行の主旨について、魯庵は「凡例」の中で、

　是等到底覆瓶にだも値ひせざるものを集めて更に鉛槧に上すは大方の毀を免かるゝ能はざれども畢竟唯だ十年文壇に住せし余一箇の記念として幸ひに大橋君の好意に由て剞劂に附するに過ぎざるなり。

と述べている。「余一箇の記念として」というのは多分に謙遜を含んだ表現であるが、見方を変えれば「記念」とするに足るだけの小

Osaka Shoin Women's University Repository

品を選択した、という自負ともうけとることができよう。

ここには、附録の「嚼氷冷語」を含めて十八篇の文芸評論、随筆が収められているが、

集載の諸篇は多く國民之友、女學雑誌等の諸誌に寄稿せしものにして今より見れば有繋に穉びて穏健を缺くもの少からざれども些か二三の字句を修正せし外は惣て改竄せず。却て大方諸君が笑謔の資料となす。

と魯庵が記しているとおり、「嚼氷冷語」を除いて、全篇雑誌に掲載されたものの再出である。

二十年代前半を中心に数多く発表された文芸評論の中からは「詩文の感應力」「詩文の粉飾」「詩辨（美妙の韻文論を讀みて）」の三篇が選択されている。作品評が一篇も取り上げられていないのは、それらの多くが時事的な要素を多分に含んでいたためと思われるが、初期評論の中から右の三篇のみを収めた理由はどこにあったのであろうか。本稿ではこの初期評論三篇について考察してみたいと思う。

2

魯庵は「些か二三の字句を修正せし外は惣て改竄せず」と述べているが、この三篇に関しては割合多くの変更が為されているようである。そこでまず、初出と『文藝小品』に於ける異同について考えてみたい。三篇の初出年月日、掲載誌、標題、署名は次のとおりである。

『文藝小品』	初出
「詩文の感應力」	明22・7／2 「國民之友」5巻55号 「詩文の感應」 不知菴主人
「詩文の粉飾」	明22・10／22 「國民之友」5巻66号 「文學の粉飾」 不知菴主人
「詩辨（美妙の韻文論を讀みて）」	明24・1／3・1／13 「國民之友」8巻105・106号 「詩辨——美妙齋に與ふ」[注3] K. U. 生

紙面の関係上、本文の異同の詳細については稿を改めることにして、ここでは魯庵の改稿の意図を損ねないよう配慮した上で、分析、総合したエッセンスだけを記すことにしよう。煩雑さを避けるため、「詩文の感應力」は㊟、「詩文の粉飾」は㊙、「詩辨」は㊜のマークで示し、異同の箇所は『文藝小品』の形式段落と行数で次のように表すことにする　例　㊜①5　この場合は、「詩辨」の第一段落の五行目に異同があるということである。以下この方式に則って記載していく。視点は、[注4]

A、内容に関する変更
　ⓐ語句の変更　ⓑ段落の変更

B、用字・表記に関する変更
　ⓐ漢字の用字変更　ⓑ仮名の用字変更　ⓒ送り仮名の変更

Osaka Shoin Women's University Repository

ある。そこでまず、初出と『文藝小品』に於ける異同について考えてみたい。三篇の初出年月日、掲載誌、標題、署名は次のとおりである。

B、用字・表記に関する変更

ⓐ漢字の用字変更　ⓑ仮名の用字変更　ⓒ送り仮名の変更

ⓓ平仮名と漢字との変更　ⓔ外来語表記の変更

C、表記形式に関する変更

ⓐ句読点の変更　ⓑ傍点及び漢文の返り点の変更

ⓒ段落変更時の表記形式の変更　ⓓ区切り符号の変更

D、誤植によって生じたと思われる変更　及び変更の不適当

右のように大きく四分類した。個々の異同の例示については、典型的と思われる数例を除いて、異同箇所を指摘するにとどめた。

A、内容に関する変更

ⓐ語句の変更

何といっても異同を見る上で最も重要なのが語句の変更である。ここでは便宜上、助詞・助動詞とそれ以外のもの、そして熟語とに分けて考察したが、三篇を通じてみると、変更の仕方に幾つかの共通点が見出せるようである。

Ⅰ明確さ・わかりやすさを増すための変更

第一に「明確さ・わかりやすさを増すための変更」が挙げられる。中でも特に多いのが「(1)文の簡略化」によるものである。「簡略化」と考えてよい変更には、一文を二文に分ける、二文を一文にまとめる、不必要な修飾語を省いたり表現を改める、といったものがある。

一文を二文に分けた例としては、

㊗⑥1美妙が第一に一撃を加へし反對論者とは思ふに出版月評に露伴が葉末集を評せし F. C. A. ならんが、其說の當否は兎に角、彼が虛實論はポーエムとノーベルの相違は着眼點にあるを辨ぜしなるに、……注5

⇩美妙が第一に一撃を加へし反對論者とは出版月評に露伴が華末集を評せし F. C. A. を暗示するものなるべし。渠が說の當否は兎に角、其虛實論はポーエムとノーベルとの相違は着眼點にあるを辨ぜしに、……

が挙げられよう。その他には、㊕①6、⑬1、㊗⑥6、⑦7があるが、㊕⑬1の場合は、

㊕⑬1詩文の感應は文字にあらずして風情にあり、

⇩詩文の感應は文字にあらず、風情にあり。

と、接続助詞「して」を読点に変更することによって、明確さを増すだけでなく魯庵の主旨を強調してもいる。これが「詩文の感應力」の最終段落の初めの一文であることを考えあわせると、この変更は大いに有効であると思われる。

二文を一文にまとめたものには、

㊗⑧10詞をのみ飾り姿さへ美くしければ歌道の奥儀に協ふものと誤まりしは終に末世の衰替を來せり、加茂本居等の人々力を盡せしかど古學を振興せしのみにて結局是が範圍外に出ずる事能ハざりし。

⇩詞をのみ飾り姿さへ美くしければ歌道の奥儀に協ふものと誤

Osaka Shoin Women's University Repository

まりしが故に終に末世の衰替を來し、加茂本居等の人々力を盡せしかど古學を振興せしのみにて結局之が範圍外に出づる事能はざりき。

㊗⑤20老媼癡婆或は感服して首肯せんか僅に地理初歩を讀得るの兒童も何ぞ甘んじて聞くを欲せんや。

⇩老媼癡婆或は感服して首肯すとも僅に地理初歩を讀得る兒童すら何ぞ甘んじて聞くを欲せんや。

の二例、他に感①8がある。㊙⑧10では「來し、」と次の文に続けたことによって、加茂本居等の努力を古学の振興以上のものにしなかった原因の一端が、「詞」や「姿」さえ美しければ「歌道の奥儀に協ふ」とした誤まりにあったことを示している。接続助詞「とも」に変更した㊗⑤20に於ても同様であるが、二文を接続し関係づけることで、文意を明解にしているのである。

余分な修辞を省いたり、他の語に置きかえたものは極めて多い。一例として、

感④9如何に悲慘痛苦の句を重ぬるもサラ〳〵として流麗なるも若し風情を缺けば是れ僞飾の文字にして……

⇩如何に悲慘痛惻の句を重ぬるとも若し風情を缺けば是れ僞飾の文字にして……

感④7胸裡の感慨を洩せし方丈記にして猶ほ文飾の爲に氣魄を失ひし處多し、

⇩一代の傑作方丈記すら猶ほ文飾の爲に氣魄を失ひし處多し。

をあげておくが、感①7 ③12 ⑤1 ⑤2 ⑧1 ⑩1 ⑫23 ㊙⑥8 ⑨15 ⑨16 ⑨22 ㊗①4 ⑤2 ⑤10 ⑤14 ⑥1 ⑦9 ⑧8 ⑩30等もそうである。尚、「詩文の粉飾」の第一～四、九～十一段落に於てはかなりの改稿が為されている。使用している語は共通していることが多く、内容的に要約、簡略化されたものが多いが、大幅な文の削除については後ほど取りあげることにする。

「文の簡略化」と同様、多く見られる変更に、「**(2)意味の平易化**」がある。これは、意味が難解であったり、とり違え易かったりする表現をわかりやすく改めたものである。

例えば、

感③16胡澹菴の封事も文天祥の正氣歌も皆風情のみ文字に於て何かあらん、

⇩胡澹菴の封事も文天祥の正氣歌も單だ文字を以てすれば何等の價値あるにあらざるなり。

感⑬7雙ケ岡の法師焦尾琴の作者今何処にかある、

⇩此故に我らは敢て信を文壇に求めんと欲す。今の表面のみ飾りて陸離たるを競ふものゝ如きは却て望まざるなり。

㊗⑨1カアライルは音調を重んぜし人なり、然るも猶ほ曰く樂調的なるをもて詩を說く茫漠たる舊說に同ずる能はず、……

⇩カアライルは音調を重んぜし人なり。然れども猶ほ曰く詩を說くに唯だ樂調的の一方面のみを以てする舊說は餘りに漠然に過ぐ。……

等がそうであり、同様の例は、感①9 ②13 ③7 ④1 ⑤6 ⑥5 ⑦2 ⑨5 ⑫16 ⑫20、㊙⑤1 ⑤11 ⑤12 ⑥6 ⑦9

Osaka Shoin Women's University Repository

⑧2　⑧10　⑨15、[注6]　弁⑤2　⑤14　⑥2　⑥6　⑥8　⑦7　⑦11　⑩12　⑩29　⑪22にも見られる。

唯、ここで注意すべきは、「平易化」は一面曖昧さの排除につながっているという点である。例示した前二者をみても明らかだが、文意を平易に言いかえると同時に、推量・反語といった文末に余韻をもたせた表現を、断定的表現に変更している例が相当数あるのである。つまり、読者の読解力に委ねていた部分を、魯庵が最後まで明確に言い切っているということである。「平易化」が主旨の強調と関連しあっていることを示す好例であろう。

また、

感②1曾て美術展覧會に於て刺繍の屏風を見る、
⇩曾て美術展覧會にて刺繍の屏風を見る。

のように、漢文訓読風の堅苦しい表現を和語的な柔らかな表現に変えたものや、

弁⑤8一韻一句の爲に或は悲み或は憂へ……
⇩……或は悲み或は憂ひ……

のように、動詞の活用の種類をより現代語的に変更したもの、或いは、

粉①8天晴れ雲散ずるの晨　⇩天晴れ雲散ずる晨
弁③12世の歡呼を買得るの說　⇩世の歡呼を買得べき說
弁⑨6棒を以て板を叩くが如く　⇩棒を以て板を叩く如く

のように、連体修飾の格助詞「の」や「が」を削除したり、他の助動詞に置きかえたもの（他に弁⑤15　⑤19　⑤20　⑤38がある。）など、漢文的・古文的な要素をできるだけ排除しようとした意図が読みとれる。これも一種の「平易化」と考えてよいであろう。

更に「意味の平易化」を顕著に示している例として、熱語における変更がある。難解な語を一般的なわかりやすい語に変更したものには次の十五例、

感①6感仰→感動　②2精美→美麗　⑥5筆尖→筆頭　⑫20凄清→凄凉　⑫24神韵→情趣　粉①5候→頃　①8雲霄→雲表　②2構結→結構　弁②4熟通→通讀　③6鑑別→區別　④8⑤9吾人→我等　⑤1⑤3余→我等　⑤33余等→我等[注7]　⑤40獨行→獨斷　⑩30流亞→亞流

漠然としたイメージの語を、明確な限定されたイメージの語に変更したものに次の七例があげられる。

感②16精→精巧　粉①1青山→茂林　①3雜草→蓬生　①8大山→大獄　⑤13情→情致　⑥9佳麗→麗粹　弁⑥7想→詩想

また、「平易化」の一つの方法として、難解な部分の削除がある。「詩文の粉飾」では、再出にあたって最終部分のスペンサーの英文詩が全て削除されているし、弁⑤15では、

幼稚なる外形論者は屢々唱道せし處なれど、苟りにもライムスターの嘲罵を避けんとするもの未だ一人も測度する能はざりけり

という一文が省かれている。これは「詩想」を軽んじ「聲調」のみを強調する主張に対する反論を述べた部分であるが、スペンサーの英文詩同様、「ライムスターの嘲罵」といったものが、一般読者に

Osaka Shoin Women's University Repository

難解であったためと思われる。㊥⑦9の

若し詩の本來を音調にありとせば Lyric をもて常に Dramatic 域は Epic 以上に置かざるべからず。失樂園の價値抑も何れに向つて求むべきや。

の削除も同じ理由によるものであろう。

初出の「國民之友」がいわば知識階級の読みものであったのに対し、単行出版の『文藝小品』は一般の読者を対象としなければならなかった。魯庵が様々な角度から行った「平易化」の試みは、対象とする読者層を考慮した結果とも言えるだろう。

次に内容に関わるウエイトの高い変更として、「**(3)文脈の明確化**」があげられる。これは語や文の関連づけ、接続に関する異同で、文脈が通るように表現を加えたり、接続詞を改めたりした場合をさしている。

例えば、「詩文の感應力」の三段落の冒頭に、魯庵は「今俳諧語を借りて詩文を說かば」という語をつけ加えている。「詩文の主たるもの二あり、一を風姿と云ひ一を風情と云ふ」で突然始まる初出と比較すると、「刺繡の屏風」と「牧溪が瀟湘の圖」とを比べて論じていた前段落との視点の転換が明確に示されたのがよくわかる。但し、この付加には、「詩文」を論じるのに「風姿」「風情」といった「俳諧語」を安易にそのまま用いてしまった反省もこめられているようである。これも魯庵の文学観の変化を示すものといえようか。同様に、㊥⑩1「斯の如く」は前段落とのつながりを、㊥⑧3「蓋し」は前文との小さな視点の転換を示す付加である。㊥⑨1では「然るも」を「然れども」とし、逆接の意を強調している。(感②10には「然らば」を「然れば」とした例がある。)㊥⑪4では「却て感仰の度を強ふするなれば」を「強ふするを見て愈々」と改め、限定的な事実として内容を強めているし、㊥⑪1では「是を」を「今」にかえて、前段落との話題の相違を明らかにしているのである。

また、助詞のみを変更して、文意のつながりをより明確にしている例も多い。例えば、

㊥⑨6歌集に於て見る事少なきも芭蕉は常に如斯自然の感想を咏みしかバ……

⇩其集に於て却て見る事少なけれども芭蕉は常に……

のように、係助詞「も」を接続助詞「ども」或いは「とも」に改めて逆接としてのつながりを強めたもの(他に感④9 ㊥⑤12がある)や、逆に

感⑨1艶麗瑰奇の文字は趣味に乏しき人をも喜ばしむべければ作る事極めて易し、

⇩艶瑰麗奇の文字は趣味に乏しき人をも喜しむべくして作る事極めて易し。

のように、順接確定条件を示す「ば」を除いて単純接続に変更したものがある。右の場合、初出では「艶麗瑰奇の文字」がたやすく出来るのは、「趣味に乏しき人をも喜ばし」せることができるからだ、という因果関係が示されているが、単純にそうは言いきれない、それが「して」への変更となって現れたのであろう。これと同様の例

Osaka Shoin Women's University Repository

は㊙⑦10にも見られる。その他にも、「説きしが」を「説きて」と変えて後続の文へのつながりを強めた例（㊙⑤12）や、動作の起点を表す格助詞「より」の位置を変更させることによって、文意を明瞭にした例（㊙⑤20）等がある。

「明確さ・わかりやすさを増すための変更」の四つめの方法として、「**(4)主格・目的格等の明確化**」があげられる。これは、指示語を的確な名詞におきかえたり、主格・目的格・所有格等を示す語を補ったりした場合の変更である。

㊗①6果して斯の如くなれば　⇩仮に此説の如くんば
　⑨5詩に雌黄を加へしを見るに
　　⇩詩に雌黄を加へしものを見るに
　⑫17些末に拘執し……　⇩些末の文字に拘執し……
㊙⑥8文學の技術者たるを免かれず、
　　⇩文學の技術者たる毀を免かれざるを。

の他、㊗④5　⑥1　㊙⑪2　㊙⑦7がある。

主格を示す助詞「は」を付加したものには、

㊙⑤10其聲調を作りしもの何ぞや。……其聲調の起因する處果して偶然にして想の緣由する事毫も無きか。
　　⇩其聲調を作りしものは何ぞや其聲調の起因する處は果して偶然にして想の緣由する事曾て無きや。

の他、㊙⑥8　⑨2があり、同じく「の」を付加したものに次の二例がある。

㊗②6却て粗末なる一幅能く恍然たらしめしは何故ぞ、
　　⇩却て粗末なる一幅能く恍然たらしめしは何故ぞ。

㊙⑨4其發出する處の文字自然に音樂的なるは元より當然にして、
　　⇩其發出する處の文字の自然に音樂的なるは固より當然にして、

その他、所有格を表す「の」の付加・変更は、㊗⑫21「紅葉山人の京人形」や㊙②2「都外の客たりし人」に見られる。㊙⑦8では「詩學者が專念の本來の問題として討盡すべきにあらず」を「專念に」と改め、修飾の関係を変更している。㊙⑬15では「ライミストは poor poet の義なる事を」を「ライミストとは」と比較の基準を示す格助詞を補って定義づけの意を強調しているし、㊙⑦14では「却て心裏の俗腸を現はすに同しからん」を「現はすと同じからん」とし、比較を明確にしているのである。これらの助詞の付加・変更は全て、文中の主格・目的格・所有格等を明らかにし、修飾被修飾、或いは比較の関係を強調しているといっていいであろう。

五つめにあげたいのは「**(5)時点の適合**」である。魯庵は改稿にあたって、初出との時間的な隔たりによる不都合を幾つか修正している。その典型的な例が㊙⑩に見られる大幅な削除である。魯庵は「スペクテートア百四十號」に掲載された「R・D氏」の「寄書」に関する部分を全て除いている。当時であれば恐らく知られた雑誌であり、「國民之友」の読者の中にもこの「寄書」に目を通した者もあったであろうが、十年を経た時点では引用するに足らないものになっていたためであろう。その他、小さな語句の用い方にも発表時点を考慮した跡が窺える。「曾て」という語を加えたり（㊗②2）

Osaka Shoin Women's University Repository

他の語とおきかえたり（㊕⑤11）したもの、左のように現在形を過去形に改めたものがその例であろう。

㊝②2一の感念も浮ばず、⇩一の感念も浮ばざりき。

⑧4章句に牽制せらるゝが故なり、⇩牽制せられしが故なり。

逆に時点を越えて通用する事柄に対しては、現在形に変更している場合もある。例えば、

㊟⑨15芭蕉翁終焉記は前後無比にして平凡の文字をもて非常の感應力を有せしは專ら風情を寫せしならずや。

⇩芭蕉翁終焉記の如き平凡の文字をもて非常の感應力を有するは專ら風情を寫せし爲めならずや。

があるが、㊕②4にも同様の異同が見られる。

Ⅱ主旨を際立たせるための変更

三篇の改稿の共通点として二つめにあげられるのは、「**主旨を際立たせるための変更**」が数多く為されているということである。

最も端的な方法として「**(1)文意の強調**」がある。一例として、

㊝⑥7平凡の文字を使用せし巧妙は古今隨一とジョンソンも盛んに是を稱揚せり、

⇩平凡の文字を使用せし巧妙に於ては古今隨一と平生許可少なきジョンソンすら盛んに之を稱揚したり。

があげられるが、内容を強調する修辞句――特に「徒らに・只管・畢竟・愈々・猶ほ・却て」といった副詞が多い――を加えたもの（㊝⑥3　⑧3　⑨6　⑩1　⑫18　⑫22　㊟⑦13　⑪4）や、「すら・のみ」といった副助詞に変更したもの（㊝④8　㊕⑤3）、或いはそうした副助詞を付加したもの（㊟⑦10　㊕⑤18　⑩3）、また、格助詞「を」を副助詞「は」に変更してそのものを特にとりたてて述べたり（㊝⑫21、㊟⑤12）、列挙を示す「も」を「は」に変えたり削除したりして限定的な意味を強めたもの（㊝④6　㊟⑪4　㊕⑤18　⑤29）など多数見出される。これ以外にも㊝①6のように「白居易の文こそ」を「白居易の文は最も」と変更した例や、㊟⑥8「到底文學の技術者たるを免かれず、」の文末を「免がれざるを。」とした例、㊟⑪5「文學の感應力も些々たる字句の粉飾にあらざるを知るべし。」を「知る。」、同様に㊕③11「惜むべく彼は時期を見るの明なくして」を「惜むべし」と言い切った例、更に㊕⑬1のように「美妙齋主人、」を「美妙齋よ、」と改めた例などがあるが、これらは皆、文意を強調し、主旨を明確に示すための変更である。

「主旨を際立たせるための変更」の二つめの方法として、「**(2)文末における変更**」がある。これは、一言で言えば文末処理の異同なのであるが、主張したい部分の文末を断定的表現に変えたり、逆にさほど重要でない部分を婉曲的に改めたりした場合をいう。先に述べた「文意の強調」とやや重複する部分もあるが、ここにあげたのは、強調とまでは呼べないものである。

まず、婉曲的な表現を断定的表現に言いかえた例として、

㊝②12天下の名文章と許さるゝならん、⇩……許さるゝなるべし。

㊕⑤16字句の修飾に苦心する事余強ちに是を無用なりと云はず、

⇩……苦心するは強ち無用にあらず。

Osaka Shoin Women's University Repository

等があげられるが、前者では「なるべし」と改めて当然の意を加えているし、後者では断定的に言い切ることで次に「然れども」で続く魯庵の主張を強調しているのである。同様の例に㊐②9　②17　㊙⑤13　㊙③3　⑤17がある。また㊙⑤11では「想の縁由する事毫も無きか」を「無きや」に改めているが、これも反語的要素をより強めようとした変更ではないだろうか。

次に、断定的な表現を婉曲的表現にかえた場合についてであるが、一例として、㊐②14「唯紙絹を汚すのみ、」を「のみにて」と柔らげたもの、或いは㊙⑨5　⑨14のように「……の如き」という語を付加することで例示を広義に解釈させたもの等があげられる。また、美妙の立場に対する考慮からか、次のような変更が見られるのも興味深い。

㊙⑤15美妙は魯(ママ)が先人も往々説きしが如く……
→美妙を初め先人も往々説きし如く……

その他、㊙⑤31「大に惑ふ處あり」が「惑ふ處少なからず」、㊙⑪⑧「聲調を以てすべきに」が「聲調を以てすべき筈なるに」と改められた例や断定の助動詞「なり」が排除された例（㊙⑥1　⑦9　㊙④7　⑥3）などがある。

いずれにしてもこれらの変更は、何を断定的に述べ、何を婉曲的に示すか、という魯庵の意図を敏感に伝えているといえるだろう。

「主旨を際立たせるための変更」として三つめに取り上げるのは、**「(3)文学観の変化による変更」**である。これは言うまでもなく魯庵の文学観の変化に伴って削除・変更された異同をさしている。十年余りのブランクが魯庵の文学観にどのような変化を来たしたか、は異同を調査する上で最も興味ある問題といえる。

まず、熟語に於ける変更であるが、㊙中、次のような異同が見られる。

③7名句→名文章　⑥1　⑨21文學→詩文　⑥15文學者→詩人

これらは一見単なる同義語の置きかえのように思われるが、「文學→詩文」「文學者→詩人」という変更には、魯庵が「文學」や「詩」をどう捉え、どう定義づけていたか、という問題が深く関わっている。魯庵は『文學一斑』の中で「詩」と「哲學」とを総括したものとして「文學」を定義している。「文學」という語を排して「詩」に改めたのは、論じようとする範囲に「哲學」が含まれないことを明確に示すためだったと思われる。初出の時点では曖昧だった「文學」についての定義が、ここでは明瞭に把握されているのである。標題を「文學の粉飾」から「詩文の粉飾」へと変更したのも同様の意図によるものであろう。

「名句→名文章」の変更は、魯庵の主張が「句」に限定して捉えられるのを防ぐためのものであったと思われる。㊐中、「風姿」「風情」について述べる際に、「今俳諧語を借りて詩文を説かば」という一文が付加されていたが、「詩文」全体に関わる問題を論じているのだ、という意識が常にあったためではなかろうか。

このことは、㊙に於て大幅に削除されている部分を見ても明らかである。魯庵は初出には其角の「芭蕉翁終焉記」[注8]の本文を引用しているが、『文藝小品』では引用部分を全く削除し（㊙③・④に於て

Osaka Shoin Women's University Repository

も和歌や漢文の例示が大幅に除かれている)、「全章數千言」という一語に置きかえてしまっている。同様に、其碩の「息子氣質」や巣林子の「天網島情死の段」の本文引用も全て省かれ、代わりに、

ドストエフスキイの如き時の批評家より天下の惡文章家と罵られたりき。而も渠が作の最も心悸魂驚せしむるものあるは隱れなき事實ならずや。トルストイの如きは全く文章を度外し粧飾を以て藝術の目的とするを太く斥罵したりき。而も渠は常に人の肺腑に徹する力あるにあらずや。

と、ドストエフスキイとトルストイが引かれているのである。これは魯庵の論が、近世の作品ばかりを対象とするのではなく、もっと広く外国文学を含める範囲を問題としている、ということを示している。と同時に、『罪と罰』の訳出をはじめとする外国文学との出会いが魯庵に多くの収穫を与えたことをも伝えているのである。

その他、魯庵の文学観の変化を感じさせるものに次の変更がある。

㊙⑥4ポープは一代の詩人にして古今に推稱せらるれども華麗の爲に一身を犧牲にしたればスウ井フトの明亮にもアヂソンの想像にも及ばず。

⇩……スウヰフトの深酷にもアヂソンの善謔にも及ばず。

「スウヰフト」も「アヂソン」も共に魯庵が愛し評価した作家であるが、「明亮→深酷」「想像→善謔」へとその評価が大きく変化しているのである。後者に関しては「想像」という表現が少々曖昧であったため限定的な語に代えたのかもしれないが、「スウヰフト」の場合は「明亮」さの裏に隱された辛辣さ、「深酷」さの方をより作家の本質的なものとみたためとうけとるべきなのだろうか。

また㊥⑩30では、初出にみられる「シエリー」の名が再出では省かれている。「ポープ、ドライデン、コリンス」と同列に並べることを避けた理由は何であったのか。ここにも十年の隔たりによる文学観の変化が現れていると言えるだろう。

Ⅲ文のリズムを整えるための変更

三篇の改稿に於ける共通点の三つめは「**文のリズムを整えるための変更**」が為されているということである。これは内容的には殆ど等価でありながら、字数を変えて文の調子やリズムを整えたものをさす。助詞・助動詞以外の変更には、

㊨②10然らば爲辨抄の說は誤か、⇩然れば爲辨抄の說は誤れる乎。
㊥③3彼の韵文なるものをして……⇩彼の所謂韵文をして……

の他、㊨①6 ⑤4 ㊙①1 ⑦13 ⑧1 ⑧9 ⑧11 ㊥⑨3 ⑬14がある。助詞・助動詞の変更には、接続助詞「ど」を「ども」に変えたもの(㊨③6 ④7 ⑤4 ⑥6 ⑧3 ㊙②2 ⑤8 ⑦9 ⑧4 ⑨9 ⑨21 ㊥③2 ③4 ④3 ⑤22 ⑤38 ⑤39 ⑩2 ⑪13 ⑪16)や、接続助詞「て」を省略したもの(㊨⑦1 ㊥②1 ⑦1)、打消しの助動詞の連体形を「ぬ」から「ざる」に変えたもの(㊨⑤10、㊥⑩20 ⑪12)、他に「で」を「ずして」に変えたもの(㊥⑤18)等があげられる。

Ⅳ誤りの訂正としての変更

Osaka Shoin Women's University Repository

共通点の四つめとしては「**誤りの訂正としての変更**」がある。ここには意味の不適当を改めたものを含めることにする。

誤植・誤記の訂正には、㊙⑨11「三日月の記」を「三日月日記」と改めた例の他、濁点を補ったもの（㊛④3出しかと→出しかど）⑩6なげかし→なげかじ　⑩8むぐらか→むぐらが　㊙⑤5なさゝるも→なさゞるも　⑦14同しからん→同じからん　⑧4ものなれと→ものなれども）や、不鮮明な活字をとり変えたもの（㊛⑪2）等がある。

文法的な誤りを正した例としては、㊛⑤5「ドライデンとポープとを比較せし中に……」に見られるように、並列の格助詞「と」を付加したもの（㊙⑤1　⑥7　⑥14　⑥16　⑧3　㊗⑤30　⑥3　⑥4　⑦1）や、助動詞「き」の終止形を「し」から「き」に正したもの（㊙⑧11　⑨3　㊗⑨10）があげられる。

意味の不適当を改めた例には、㊛②17辭達調→辭達　⑥1修飾→襲踏⑥5逸散→迸逸　㊙③2高傑→高邁　⑨12禪味→哲味　⑨16脆文字→冗文字⑨3氣焔→氣魄　㊗⑦3音調→調　の八例がある。[注9]

ⓑ段落の変更

段落の変更は㊛②と㊙③・④に見られる。㊛②の場合、初出は「刺繍」と「牧溪」の図とを比較した部分と、「爲辨抄の說」が誤りか否かを論じた部分とを別段落にしているが、再出では一段落にまとめている。これは「爲辨抄の說」を論じるのに「刺繍」と「牧溪」とを例にとっているためと思われる。㊙③・④の場合は内容的にもかなりの異同があるため一概には論じられないが、再出の方が理路整然とした段落分けが為されており、主旨が明快に示されているといえよう。

B、用字・表記に関する変更

ⓐ漢字の用字変更

三篇に於ける漢字の用字変更は次のとおりである。[注10]是→之（㊛①9　②13　②16　⑥4　⑥7　⑧1　⑫23　㊙⑤11　⑧11　㊗②3　③6　⑤1　⑤4　⑤22　⑩12　⑬4　⑬5）彼→渠（㊗②4　③5　④1　⑥2　⑦10　⑩32）彼れ→渠れ（㊛⑥2　㊗⑥5）元より→固より（㊗⑨5）元より→本より（㊙①2）惣て→總て（㊗⑦3）惣じて→總じて（㊙⑩1）凡て→惣て（㊙①2）例はゞ→喩はゞ（㊛③3）擣つ→打つ（㊙①5）愈々→愈（㊙②1）三十→卅（㊙⑤4）句調→口調（㊙⑥10）結搆→結構（㊙⑥12）一班→一般（㊙⑦2）滯→帶（㊗⑪4）政事→政治（㊗⑪17）

ⓑ仮名の用字変更

仮名の用字の異同には「ト→と」（㊗⑤1）に見られる片仮名から平仮名への変更、「へ→え」（㊙①8聳へ→聳え他に㊗⑤3　⑩20　⑪1）に見られる現代語的表記への変更等がある。いずれも読み易さ、わかり易さに通じる変更といえるだろう。但し「ず→づ」（㊙⑧11出ずる→出づる　他に⑨13）のように古語的表記に逆戻りした

Osaka Shoin Women's University Repository

例外も見うけられる。[注11]

ⓒ送り仮名の変更

送り仮名の変更には次のようなものがある。唯→唯だ（感②17 ③8 ⑫20 粉⑨8 弁⑦10 ⑨5 ⑩32）豈→豈に（感①9 ③13）猶→猶ほ（感③9）稍→稍や（粉⑨3）其→其の（感④6）後→後ち（粉③6）否な→否（弁④1）我が→我（粉①1）喜ばしむ→喜しむ（感⑨1）生ひ茂る→生茂る（粉①4）助くる→助る（粉⑤1）出でたる→出たる（粉⑨1）不審かしい→不審しい（弁⑥4）「唯→唯だ」のような文頭、文中に来やすい語には送り仮名を加えた例が多く、動詞の場合には逆に削除した例が多い。これも読みやすさへの考慮かと思われる。

ⓓ平仮名と漢字との変更

平仮名を漢字に変更した例として、か→乎（感②10 ②11 ②19 粉⑦12 弁⑩32 ⑬14）然れども→然れ共（粉①7 弁⑦1）雖ども→雖共（弁④8）もの→者（粉⑤2 弁③1）たのしみ→樂しみ（感⑪1）まこと→誠（弁⑥6）その→其（感⑬3）かかれば→斯れば（感⑫1）ある→或（粉⑧1）ある→在る（感⑬1）ある→有る（粉①1）そそぐ→灌ぐ（粉⑦1）があげられる。「か→乎」への変更が目立つが、これは漢字を用いることで反語・感動の意を含めようとしたためだと思われる。また「或・在る・有る」への変更には、漢字によって意味の弁別を明らかにし、誤読を防ごうとした工夫が窺えるのである。

ⓔ外来語表記の変更

外来語表記の変更は弁に於ける次の二例だけである。メロデー→メロディ（⑦4）ポエトリ→ポエトリイ（⑩2）

C　表記形式に関する変更

ⓐ句読点の変更

句読点に於ける変更数は次表のとおりである。

変更	変更の意図・理由	感	粉	弁
句点の付加	◦文意（文の切れめ）を明らかにするため	8	1	3
読点の付加	◦名詞の並列の煩雑さを避けるため	2	6	0
	◦助詞の変更によって必要となったため	1	0	1
句点の付加	◦本来あるべき文末に付されていなかったため	3		3
	◦一文を二文に分けたため	1	0	0
読点の省略	◦意味上必要がないため	0		2
	◦助詞の変更によって必要でなくなったため	3	0	2
	◦行末に位置したため	0	0	1
	◦誤植によって省かれたもの	0	0	1
句点の省略	◦後続文との関連を強めるため	0	0	1
	◦誤植によって省かれたもの	0	0	1

Osaka Shoin Women's University Repository

句点→読点	読点→句点	
。後続文との関連を強めるため	。一文を二文に分けたため	。句点とすべきものが読点で示されていたため
0	0	71 注12
0	0	12
2	1	14

ⓑ傍点及び漢文の返り点の変更

傍点の変更は全て㊥に見られる。。。。。の省略20箇所、……の省略51箇所、。。。。。の ‥‥ への変更9箇所である。初出では傍点を施したところが極めて多いが、再出では強調したい箇所のみにとどめている。

漢文の返り点は初出では全く見られないが、再出では三篇を通じて全てにつけられている。（感②18 ③12 ⑦2 粉⑤2 ㊥⑤11 ⑩4 ⑩17 ⑪4 ⑪28）これも読者の読解を助け、文意を摑みやすくするための工夫といえるだろう。

ⓒ段落変更時の表記の変更

改稿にあたって魯庵は、段落変更した際、最初の一字を下げて表記するように改めている。（感・㊥の第一段落では下げずに記されているが、これは二行目に引用文が組まれているためであろう。）この変更は視覚的に見易くするだけでなく、段落というものを強調する上でも効果があると思われる。

ⓓ区切り符号の変更

粉⑤19 ⑦3 ⑧6 ⑨5 ⑨18では、歌や漢文、他人の言を引用する際の区切り符号を‖から「」に改めている。感㊥では「」を用いており、一般的な「」で表記するよう統一を図ったのであろう。

D、誤植によって生じたと思われる変更、及び変更の不適当

誤植には感③5に見られる区切り符号（」）の欠如や、㊥⑧3殆|んで（ど正）⑥8被|（彼正）⑦9詩ならざるを|（と正）⑨3あらし|して（ず正）㊥⑥1華|末集（葉正）等の植字の誤まりがある。その他、ルビの誤まり（粉⑧2等）も多数ある。

また、誤まりとは言えないが、変更したために却って難解になったもの（感④8痛苦→痛惻）や、用字変更の不統一もあり、徹底した改稿になっていないことが惜しまれる。

3

以上、三篇の異同の実際を見て来たが、明らかなのは、魯庵がよりわかりやすく、より主旨を強調した改稿を行っていることである。語句の変更だけでなく、漢字や仮名の表記、句読点・返り点の変更・付加、そして改稿にあたって総ルビに改めたところにも、こ

Osaka Shoin Women's University Repository

うした魯庵の意図は充分反映されている。「凡例」には「十年文壇に住せし余一箇の記念として」刊行したとあったが、この三篇を通してみる限り、『文藝小品』が過去の業績を留めておくといった回顧的な意図で編まれたものではないことは明白である。十年を経た今、再び世に問うという形の積極的な修正・変更がここで行われているのである。単行出版にあたって読者層の広がりを考慮しているのも一つの証左といえよう。

このことは、視点を変えて言えば、『文藝小品』所収の諸作品が時を隔ててもなお世に訴えるべき内容をもっている、ということである。本稿でとりあげた三篇を内容的に捉えると、共に「風姿」「詩形」「聲調」よりも「風情」「詩想」を重んじる姿勢を貫いている。発表時の事情こそ異なるとはいえ、その主旨には大いに共通するものがあるのである。

では何故魯庵は『文藝小品』十八篇の中に、三篇もの共通した主旨の評論を収めたのであろうか。それは恐らく、その中に魯庵の文筆活動を支えた根本的な文学観が示されていたためだと思われる。そして三篇を一堂にまとめて収めたのも、自身の文学観の深化を示し、主旨を強調しようとする意図があったからであろう。いずれにしてもこの三篇が、魯庵の文学を論じる上で根源的な位置にあることは疑えない。『文藝小品』への改稿は、魯庵が文学に於て何を重視していたか、どう文学を捉えていたか、を知る重要な手がかりを与えていると言えるだろう。

注記

1 署名 不知庵

2 煩雑さを除くため、発表年月日、雑誌の巻号数、異同数等は算用数字で示した。

3 『文藝小品』に収めるにあたって、魯庵は三篇の標題を全て変更しているが、この「詩辨」に於ける変更は、内容をより明確に伝えようとする意図を最もよく示していると言えよう。

4 視点に関しては、檀原みすず女史の「森鷗外『舞姫』異本考―縮刷本『美奈和集』の位置づけのために―」(「樟蔭国文学」18号 昭55・12／10)を参考にさせていただいた。

5 ……は、紙面の関係上、文意のつながりにかかわらず後続の文を省略した場合を表している。

6 ㊙①～④に於ても「平易化」の例はかなり見られたが、内容的に異同がありすぎるため、ここでは示さなかった。

7 「余・吾人」の「我等」への変更は、「余・吾人」のままで変更されていない場合があることを考えあわせると、魯庵以外にも同意見の者がいたことを示唆したものと思われる。

8 九段落に見られる異同である。

9 その他、表現を文学的に改めたものに、㊙⑫20枯野→冬野(「秋夜の凄涼」と対応させるために「冬野の閑寂」としたもの)や㊙②2半月→數旬 があげられるし、変更してもあまりウエイトのかわらないものに⑥16⑨13風情→情趣がある。共に特別な効果をあげているとはいいにくい変更である。

Osaka Shoin Women's University Repository

10　ここには、仝→同（感④7　粉⑨17）、糀→粧（粉⑨3　⑨10　⑨17）、略→畧（弁⑩9　⑩10　⑪36　⑪42）、躰→體（弁⑪1）といった正字・俗字の変更は含めなかった。

11　尚、『文藝小品』では、「ゐ→な」（感②11　③10　⑤7　⑧3　⑨7　⑪2　粉①2　⑤6　⑥12　⑦5　⑦10　⑧7）、「ハ→は」（感③15　粉⑧11　⑨13　⑨24）、「バ→ば」（粉⑨5　⑨7　⑨12）に見られるように、変体仮名は全て排除されている。

12　「詩文の感應力」に於ける読点から句点への変更が目立つが、これは初出に句点が全く用いられず、句点とすべきところにも読点が付されていたのを改めたためである。